

「人間回復の橋」

龍上工業(株) 代表取締役社長

Takigami Masayoshi
龍上 晶義



昨年の暮れに、高校・大学と同級生だった友人と30数年ぶりに再会しました。凡庸な私とは違い高校時代から才能ある一端を見せてはいましたが、学業のほうはさっぱりで、高校の担任から「国語と社会と英語だけやれば何とかなる。」(本人談)という意味不明な進学指導の結果か、一年浪人の末に、私と同じ大学に入学しました。

大学入学後は、全く会う機会もなく、風の噂程度の話でしたが今回確認してみると、大学時代にひよんなことからプロレスにはまり、アントニオ猪木や前田日明らとも親交を結びその後、新日本プロレスの経営の一端にも携わるといった面白い経歴の持ち主です。その後、大学は中退し本来の趣味の競馬新聞の仕事に携わる傍ら、テレビの放送作家としても活動して、現在は放送作家として自由気ままに生きているユニークな友人です。

そんな彼から「橋の仕事をしているなら」ということで、表題の「人間回復の橋」のことを知っているかと私に向かって質問されましたが、残念ながら私は知りませんでした。彼曰く、5年ほど前に、岡山県のテレビ局と「ドキュメンタリー」製作に携わったということでした。

その橋は邑久長島大橋(おくながしまおおはし)と言い、橋長は185mわずか30m水路を渡るアーチ橋で、1988年に架橋され今年で35年が経ちます。この橋の先には、国立ハンセン病療養所の「長島愛生園」と「邑久光明園」という二つの施設があり、今も150名ほどが暮らしています。私自身は、「ハンセン病」という病のことを詳しく語る立場ではありませんが、一応触れておきたいと思います。「ハンセン病」は、らい菌の感染により末梢神経や皮膚が侵されマヒが残る病気ですが、現在では治療方法も確立され、感染力も弱いにもかかわらず、「らい予防法」という法律のもと、患者の隔離と撲滅を目的に各地に療養所が建設されました。そして、この法律は1996年まで存続し、患者に対する社会的な差別と隔離が続いたと言われていました。その差別の歴史は幾多の小説にも書かれているようですが、私自身詳しく知っているわけではありません。その社会的差別は法律が撤廃された後も厳然として続き、症状が身体的に現れるため、仕事に就けない場合が多く現在でも施設に留まって生活せざるを得ない元患者が多いようです。

そんな隔離の島に、かつての患者が中心となって橋を架けようという運動が起こり、活動から17年の歳月を要し1988年に前述の「邑久長島大橋」が完成しました。わずか30メートルの水路ではありますが、それは患者にとっては社会との大きな「壁」となっていたとドキュメンタリーに登場する元患者の言葉が重く耳に残ります。そして、そこに架かった橋はわずかな水路を渡る小さな橋ではありますが、この橋を渡って多くの人が訪れ、そして患者自身もこの橋を利用して多くの情報を発信し、ハンセン病に対する正しい理解と差別の撤廃を訴え続けました。表題にある

とおり患者にとっては、まさに「人間回復の橋」となったわけです。

私たち橋梁メーカーは、橋の技術的な諸元や経済的な効果について多く議論しますが、こういった社会的使命やましてや「人間回復」のために寄与したということを考える機会は今まで少なかつたような気がします。改めて橋の持つ「力」と「意義」について、経営者だけでなく橋にかかわるすべての人たちも考えてみてはどうでしょうか。それだけ我々は、橋の建設という「尊い仕事」に従事しているということです。近年、私たちの業界でも若い社員の離職や退職が止まらない状況です。私たちは、先輩社員・先輩技術者として果たしてこういった橋の「力」や「意義」を伝えてきたでしょうか。もし伝えてこなかったとしたら、今からでも遅くないと思います。若い人たちに、この「尊い仕事」に携わる意義を伝えていくことが私たちの使命かもしれません。

時は今2024年。日本経済は荒波にもまれています。生活実感がないまま株が高騰し、2月22日に「バブル崩壊」後の最高値を更新しました。実に34年ぶりです。この間に米国株価は何と14倍になったということを知ると、日本の今の立ち位置がいかに低下したのを感じざるを得ません。一方、鋼材だけでなくあらゆる諸物価や人件費は高騰し、その価格転嫁は思うように進んでいません。「担い手不足」は、もはや限界に迫り、「2024年問題」は目前に迫りその解決方法はいまだ闇の中といった感じです。こういった混とんとし、閉塞感の充満した環境の中、橋梁建設にかかわるすべての人たち、特に若者たちが当業界の行く末に不安を抱き、そして悩んでいるのです。こういった若者たちに、私たちは本来の橋の「力」や「意義」を考え、それを次世代に繋いでいくことがいかに大切であるかということに改めて認識するべきでしょう。

邑久長島大橋の建設の運動にかかわった元患者の「この橋は、建設後30年経ったが、橋の輝きは今も変わらない。」この言葉を聞くと、一点の光明を見出した気分になるのは私だけでしょうか。この言葉は、必ずやこれから橋の建設にかかわるすべての社員や技術者にとって大きな励みになることは間違いないと思います。

最後になりましたが、今年の年始早々に発生した「能登半島地震」で被災された多くの方々に改めてお悔やみとお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復興を祈念いたしております。今後、半島部の道路整備や切土構造の道路建設の在り方などが議論され、その中で橋梁形式も検討されることと思います。本文にありますように、橋梁の持つ「力」と「意義」を再認識し、志(こころざし)高くこういった震災復興やインフラ整備に邁進する若者が一人でも多く当業界に来ていただけることを願い、この巻頭言を捧げたいと思います。